シェイクスピアの歴史劇になった王達

ジョン王
King John
1199-1216

The Life and Death of King John
英国史上もっとも評判の悪い失地王・ジョン王の波乱の後半生を描く。あのロビン・フッドの意地悪な敵として登場するジョン王を、シェイクスピアはカトリック教会の確執、英仏戦争、そして貴族たちの反乱を中心に戯曲化。フランス王の使者に譲位を迫られるジョン王は、幾多の戦争と和解を経て、修道院で修道士に毒殺される。ほかの歴史劇に比べ、時代ははるか昔の 13 世紀、中世だが、過去の歴史のなかに今日性を見事にあらわしている。現存する最古の初演の記録は、執筆（1590 年代）から約 150 年後の 1737 年だ。

エドワード三世
Edward III
1327-77

The Reign of King Edward the Third
長い間、作者不明（匿名）の戯曲だったが、18 世紀頃、一部をシェイクスピアが書いたという議論が提起され、単独ではなく、誰かとの共作で書かれたものという説が有力になり、シェイクスピアの作品群に加えられている。エドワード三世といえば、百年戦争の英雄として知られるが、この作品にも三世とソールズベリー伯爵夫人の話に加え、百年戦争のきっかけとなったイングランドとフランスの戦争の模様を芝居にしている。

リチャード二世
Richard II
1377-99

The Tragedy of King Richard II
国王の特権を濫用するリチャード二世。実際、歴代の英国王きっての美男子と謳われたリチャード二世の戴冠式は英国史上もっとも華麗だったと言われているが、そんな派手好みのリチャード二世に臣民の不満は高まるばかり。一方で大衆政治家のヘンリー・ボリングブルック（後のヘンリー四世）。は力づくで王位に就く。この物語は、王位を失ったリチャードがボンフレッド城で暗殺者の手によって非業の死にいたるまでの 2 年間の出来事が書かれている。王位交代の場面が見どころ。

ヘンリー四世
Henry IV
1399-1413

第一部 Part 1
The First Part of King Henry the Fourth
『リチャード二世』の続編。ヘンリー四世はリチャード二世を退位させ、自ら王座に就いたものの、その強引なやり方に自責の念を抱いている。加えて若き皇太子ハルの放蕩三昧の日々。コンビを組むのは稀代のキャラクターの持ち主、フォールスタッフ。その一挙手一投足が観客をひきつける、その最たるものが戦場での「死んだふり」。さらには反乱軍のホットスパーを自からの剣で射止めたというホラ話。2 人の絶妙な掛け合いが見どころだ。

第二部 Part 2
The Second Part of King Henry the Fourth
第一部では遊び放題に明け暮れていた皇太子ハル。終盤で改心の一端、兵を挙げ、勇敢に戦い反乱軍のホットスパーを倒したが、二部に入っても相変わらず国内情勢は厳しい。ハルの弟ランカスター公ジョンの辣腕もあり、ハルは病で倒れた四世にかわり、新国王ヘンリー五世として就任する。ハルを大の親友と自負するフォールスタッフは大喜び、自分の出世も間違いないと思いきや、王に着任しての第一声は、知らんぷりをしたあげくに、追放の刑に処す、というもの。その冷酷な言葉はもの悲しく、哀れを誘う。

ヘンリー五世
Henry V
1413-22

The Life of King Henry the Fifth
ヘンリー五世は即位後、すぐにフランスへ向かい、劣勢だといわれていたアジンコートの戦いでも 1 万人の「イングランド兵が 6 万の兵力をフランス軍に大勝利。まさに「イングランドの星」として講和条約に調印するとともに、フランス王シャルル六世の娘キャサリンと結ばれる。これにより、イングランド委国王がフランス王国の王位を兼ねることになる。まさに由緒正しい英国の愛国劇。シェイクスピアが書いた最後の歴史劇でもあり、完成度も高い傑作。映画ではローレンス・オリヴィエが颯爽とした五世を演じていた。

ヘンリー六世
Henry VI
1421-1471

第一部 Part 1
The First Part of King Henry the Sixth
35 歳でこの世を去ったヘンリー五世のあとを継いだのは、生後 9 か月のヘンリー六世。イングランドとフランスを統治するわけだが、フランスの領地は乙女ジャンヌの加勢もあり奪回される。一方国内では王位継承問題が再燃して、貴族は二派に分かれて対立。ウォリック伯とリチャードらヨーク方は白薔薇、サフォーク伯とランカスター方は赤薔薇を手にし、薔薇戦争への萌芽が芽生える。

第二部 Part 2
The Second Part of King Henry the Sixth
イングランドの内戦が主題。王ヘンリーとマーガレットの華々しい挙式、そしてすさまじいまでの権力闘争、それに踊らされる民衆、そんななか、第一部で活躍した有力貴族たちは次々と失脚、それを演出したのはヨーク家のリチャードだった。王ヘンリーらのランカスター家と、王位を狙うヨーク率いるヨーク家の対立は激化、本格的な薔薇戦争の火ぶたが切られる。

第三部 Part 3
The Third Part of King Henry the Sixth
30 年間にもおよんだ薔薇戦争。ヨークは緒戦に勝利、自らの死後王位を譲渡することを王に約束させたが、これに激怒した王妃マーガレットは戦闘に参加、ヨークを殺害。しかし戦況は一変、マーガレットはフランスへ、ヘンリー王も幽閉される。復讐が復讐を呼び、血が血を呼ぶ争いの果てに、ヨーク家の勝利で決着がつき、ヘンリーは束の間の安らぎを取り戻すが、勝利の立役者、リチャードの心のうちはすでに野心にあふれていた。

新国立劇場 2009 年公演『ヘンリー六世』（撮影：谷古宇正彦）

新国立劇場 2012 年公演『リチャード三世』（撮影：谷古宇正彦）

リチャード三世
Richard III
1421-1471

The Tragedy of King Richard the Third
前作『ヘンリー六世』に続く、薔薇戦争に勝ち王位に就いたヨーク家のエドワード。が、野心に燃える、その弟グロスター公リチャードを主役に、ぶざまな姿の悪のヒーローが大活躍。ついにイングランド王国の王位に就く。書かれた当時から圧倒的な人気を誇り、シェイクスピアにとっては初の成功作ともなった快作。王座に就くやたちまちのうちに破滅、転落の道をころげおちるリチャードに憐れむ者は一人もいない。

ヘンリー八世
Henry VIII
1509-47

The Famous History of the Life of King Henry the Eighth
シェイクスピアが最後に書いた（共作という見方が強い）歴史劇。それまでの歴史劇はエリザベス朝に書かれたものだが、これはジェイムズ朝に書かれたもので、ジェイムズ一世の王女エリザベスとフレデリックの結婚を祝う祝典の一部として書かれたとも考えられる。それゆえ、戦争場面はなく、逆に華やかな雰囲気に包まれた歴史絵巻的な上演で人気があった。